

“こどもまんなか社会”ってなんだろう

趣旨説明

第26期日本学術会議
土木工学・建築学委員会・心理学・教育学委員会・
臨床医学委員会・健康・生活科学委員会合同
子どもの成育環境分科会委員長

三輪律江

横浜市立大学大学院都市社会文化研究科教授・博士（工学）

日本学術会議主催学術フォーラム

“こどもまんなか社会” ってなんだろう

2023年4月、こども家庭庁が発足、同年4月にこども基本法が施行され、「こどもも大人も皆が幸せな生活を送ることのできる『こどもまんなか社会』の実現」を掲げて、子どもの総合的政策と体制の予算策定に向けて動き出している。しかしながら、OECD諸国と比較しても子どもの幸福度が著しく低いと評される日本の子どもが、誰やかに過ごせる上での社会的環境は良くなるどころか悪化するばかりである。その改善に向けては、経済的な支援に留まらず、精神面で人的支援がより重要であり、また子どもに直接関わる地域社会の意識の改革、その生活空間の改革も必要となってくる。

子どもの成育環境改善に向けては、分野横断的に、多角的に捉えていく必要がある。「子どもの成育環境分科会」は、分野横断的に18年の長期にわたり、子どもの成育環境について検討を続け、空間・時間・方法・コミュニティと4つの課題について繰り返し提言・報告をおこなってきた。

特に、ここ数十年で子どもの捉え方や支援の仕方の変容が目まぐるしい。こども家庭庁がスタートし「こどもまんなか社会」のスローガンは他分野でも少しずつ浸透しつつあるが、未だ子ども関係の業界のみにとどまっている印象もある。「少子化のなれば、社会全体で子どもにそこまでやらなければならないのか」「子どもだけをまんなかにしても解決しないのでは?」「子どもの最善の利益ってなに?」というモヤモヤを抱きながら「子どもをまんなか」にする意味、手法を模索している。

そこで本フォーラムでは、第1部で現代社会において養育する子どもと子どもを取り巻く環境について、各学問分野の最新の研究事例を用い、多分野領域から子どもの健全な成育環境について捉える。第2部では、こども家庭庁の現在の取組みを踏まえ、本来の「こどもまんなか社会」の真髄に迫る。

開催日 令和8年 8月28日(金)
14:00~17:00

申込締切
8月25日(火)
事前参加登録をお願いします。
<https://form.cao.go.jp/scj/opinion-0379.html>

会場
日本学術会議講堂
東京都港区六本木7-22-34

参加費無料
ハイブリッド開催

主催 日本学術会議
共催 公益社団法人こども環境学会
後援 公益社団法人日本小児科学会、一般社団法人日本家族看護学会、一般社団法人日本小児看護学会、日本子ども健康科学会、一般社団法人日本子ども虐待防止学会、幼児教育史学会、日本教育政策学会、一般社団法人日本建築学会
協賛 日本学術会議土木工学・健康学委員会、心理学・教育学委員会、臨床医学委員会、健康・生活科学委員会合同
協賛 日本学術会議事務局企画課学術フォーラム担当 TEL 03-3403-6295

第26期日本学術会議 子どもの成育環境分科会 子どもの成育環境分科会メンバー

委員長	三輪 律江	横浜市立大学大学院都市社会文化研究科教授
副委員長	湯川 嘉津美	上智大学総合人間科学部教育学科特別契約教授
幹事	斎尾 直子	東京科学大学環境・社会理工学院建築学系教授
幹事	安部 芳絵	工学院大学教育推進機構教職課程科教授
	伊香賀 俊治	慶應義塾大学名誉教授／一般財団法人住宅・建築SDGs推進センター理事長
	神尾 陽子	お茶の水女子大学客員教授／神尾陽子クリニック院長
	水口 雅	心身障害児総合医療療育センターむらさき愛育園園長
	浅野 みどり	修文大学看護学部小児看護学教授／名古屋大学名誉教授
	小玉 亮子	お茶の水女子大学基幹研究院教授
	遠藤 利彦	東京大学大学院教育学研究科教授
	明和 政子	京都大学大学院教育学研究科教授
	神吉 紀世子	京都大学大学院工学研究科建築学専攻教授※
	上野 佳奈子	明治大学理工学部建築学科専任教授
	西田 佳史	東京科学大学工学院機械系教授
	高橋 尚人	東京大学医学部附属病院小児・新生児集中治療部教授
	石崎 優子	関西医科大学小児科学講座診療教授
	法橋 尚宏	神戸大学大学院保健学研究科家族看護学分野教授

※所属は分科会発足当時のもの

過去の子どもの成育分科会の検討・意見表出の経緯

2007 課題別委員会「子どもを元気にする環境づくり戦略・政策検討委員会」)

対外報告 我が国の子どもを元気にする環境づくりのための国家的戦略の確立に向けて 平成19年(2007年)7月13日

(この対外報告を受けて、本分科会が設置された。日本学術会議第一部、第二部、第三部に横断的にまたがり、
子どもの成育にかかわる課題を親委員会が会期ごとに代わりながら継続して検討してきた。)

2008 提言 我が国の子どもの成育環境の改善にむけて－成育空間の課題と提言－ 平成20年(2008年)8月28日 仙田満委員長
<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-20-t62-15.pdf>

2011 提言 我が国の子どもの成育環境の改善にむけて－成育方法の課題と提言－ 平成23年(2011年)4月28日 五十嵐隆委員長
<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-t123-1.pdf>

2011 報告 我が国の子どもの成育環境の改善にむけて－「成育空間の課題と提言(2008)」の検証と新たな提案 五十嵐隆委員長
<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-h133-5.pdf> 平成23年(2011年)9月26日

2013 提言 我が国の子どもの成育環境の改善にむけて－成育時間の課題と提言－ 平成25年(2013年)3月22日 五十嵐隆委員長
<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-t169-3.pdf>

2017 提言 我が国の子どもの成育環境の改善にむけて－成育コミュニティの課題と提言－ 平成29年(2017年)5月23日
<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t235-1.pdf> 内田伸子委員長

－学術の動向 2017.10 特集 子どもの貧困－成育環境に及ぼすその影響と対策－ 平成29年(2017年)10月

2020 提言 我が国の子どもの成育環境の改善にむけて－成育空間の課題と提言 2020－ 令和2年(2020年)9月25日
<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t297-5.pdf> 木下勇委員長

2023 見解 こどもの傷害を減らすためのデータ収集および利活用の促進 令和5年(2023年)9月28日 山中龍宏委員長
<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-25-k230926-21.pdf>

心理学・教育学委員会/臨床医学委員会/健康・生活科学委員会/環境学委員会/土木工学・建築学委員会合同 24期：子どもの成育環境分科会
提言：我が国の子どもの成育環境の改善にむけて – 成育空間の課題と提言2020 – (2020.9.25)

(1) 子どもを中心においた投資と政策を（予算と政策）

- ① 子ども関連の予算と評価システム
- ② 子どもの総合的政策と法整備
- ★25期 focus ⇒ ③ 子どもに関する研究・データの蓄積と科学的知見に基づく政策
- ④ 子どもの声の施策反映と子どもの社会参画の推進

★26期 focus ⇒ (2) 胎児期・幼児期・児童期・青年期の各ステージで子ども自身の力が育まれる環境・社会づくりへ

- ① 各成長ステージで子どもが健全に育つことができる環境の改善
- ② 子どもの主体性を培う外遊びの総合的価値と非認知能力獲得の重要性

★26期 focus ⇒ (3) 子どもの育ちを多世代で継続的に見守り包括的に支援する社会づくりへ

- ① 子どもの育ちを軸に切れ目なく包括的にサポートする体制
- ② 子どもに寛容な地域コミュニティ形成と多様な居場所づくり
- ③ 子どもの育ちを支援する職能・専門家の養成と雇用促進
- ④ 子どもの成育環境改善への意識啓発と子どもの主体教育

(4) 子どものための政策拡大と分野横断的な体制を強化し居場所となる空間づくりを

<日常生活圏＝住環境>

- ① 住まい、住宅地
- ② 住宅地の中の道
- ③ 住宅地の中のコモン（公園、緑地、オープンスペースなど）
- ④ 子どものための専門施設（学校、保育園、児童館など）
- ⑤ 多世代・多機能が共存する地域施設（コミュニティセンター、図書館、福祉施設など）

★25期 focus ⇒ ⑥ 医療・健康施設

<プログラム（非日常の体験、子どものところに向かう）>

- ⑦ 自然環境へのアクセス
- ⑧ 子どものところに向かうアウトリーチ（訪問型の支援サービス）

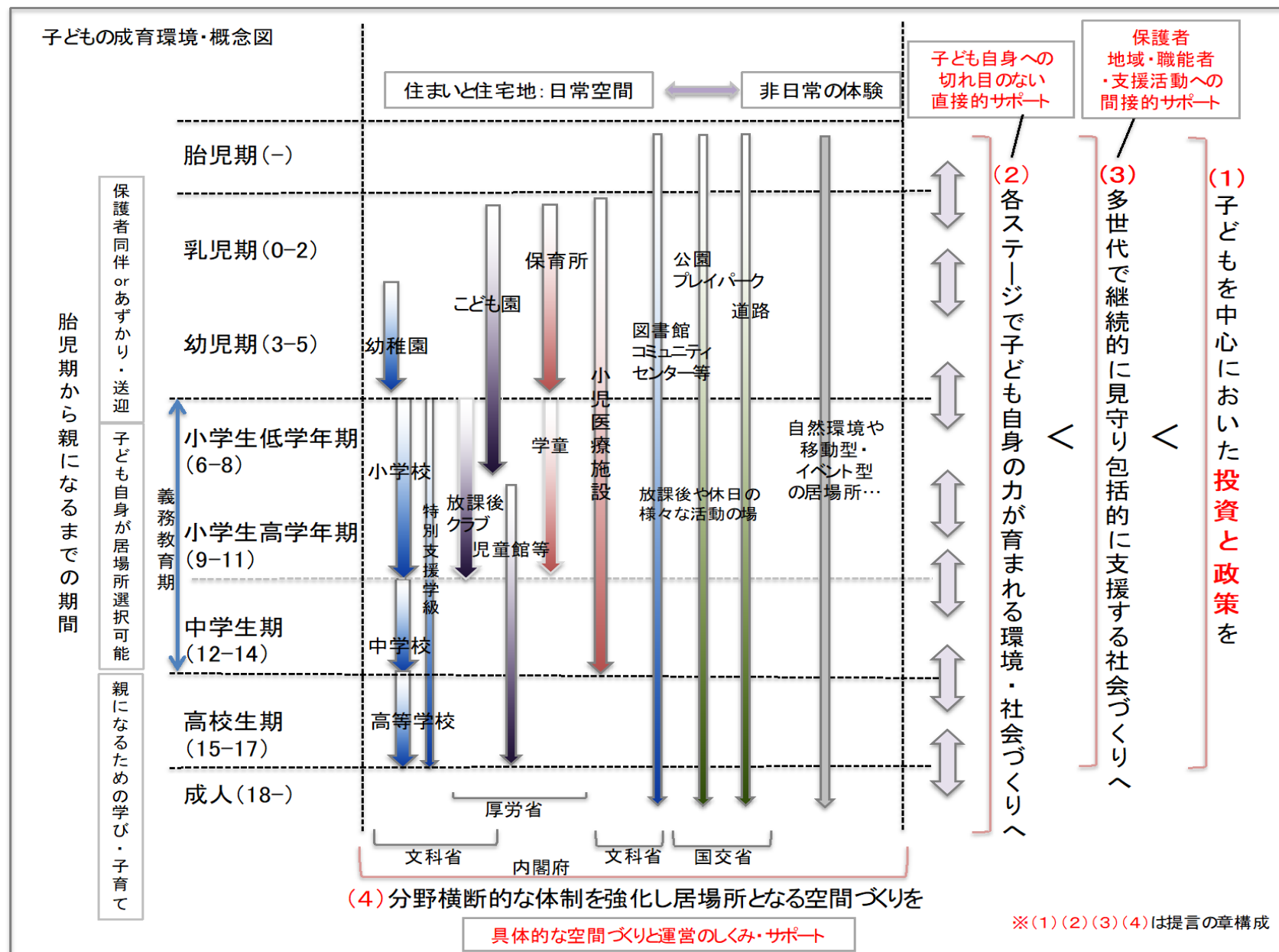


図 胎児期・幼児期・児童期・青年期の各ステージでの成長発達を主軸に、子どもの成育空間を捉える視点と提言の位置づけを通観した概念図

第26期子どもの成育環境分科会メンバーによる多角的な視点

【子どものいのちと安全】

- ・日本の新生児・周産期医療の歴史と現状（高橋尚人）
- ・子どもの生活状況の多角的理解に基づく
安全な環境のデザイン（西田佳史）
- ・子どもの食の安全－学校給食と食中毒（水口雅）

【子どものころ】

- ・発達障害と乳幼児健診－五歳児健診の意義を問う（神尾陽子）
- ・AI共生時代に必要となるヒトの脳と心（明和政子）

【子どもと家族】

- ・多様化・複雑化する家族のウェルビーイング（浅野 みどり）
- ・子どもと家族のウェルビーイングに影響する環境（法橋尚宏）

【子どもにとって居心地のよい空間】

- ・不登校、社会的養護等の子どもたちの居場所（石崎優子）
- ・健康・運動能力・学中意欲を高める空間づくり（伊香賀俊治）
- ・感覚に優しい社会生活環境の普及（上野佳奈子）

【子どもと地域社会】

◆乳幼児期における地域社会との連携

- ・子どもと大人による地域社会の探究が見出すもの
－境界線に焦点を当てて（小玉亮子）
- ・倉橋惣三の誘導保育論－「こどもまんなか社会」の実現
に向けた保育のあり方を考える（湯川嘉津美）

◆学童期以降の地域社会との連携

- ・農村立地小規模校における探検学習の再構築（神吉紀世子）
- ・子どもたちが長時間過ごす「学校」という場所
－学習環境の変化と地域拠点性（斎尾直子）
- ・子どもとともにつくる児童館
－人口減少時代の居場所再編に向けて（安部芳絵）

◆子どもとともに地域社会も育ち合うまちづくりへ

- ・子育てに資する土壌づくりはまちづくり
－地域でつなげる子育て:まち保育（三輪律江）

本日の趣旨

2023年4月、こども家庭庁が発足、こども基本法が施行され、『こどもも大人も皆が幸せな生活を送ることができる「こどもまんなか社会」の実現』を掲げて、子どもの総合的政策と体制の予算策定に向けて動き出している。

しかしながら、OECD諸国と比較しても子どもの幸福度が著しく低いと評される日本の子どもが、健やかに過ごす上での社会的環境は良くなるどころか悪化するばかりである。その改善に向けては、経済的な支援に留まらず、精神面での人的支援がより重要であり、また子どもに直接関わる地域社会の意識の変革、その生活空間の改変も必要となってくる。

子どもの成育環境改善に向けては、分野横断的に、多角的に捉えていくことが必要である。「子どもの成育環境分科会」は、分野横断的に18年の長期にわたり、子どもの成育環境について検討を続け、空間、時間、方法、コミュニティと4つの課題について繰り返し提言・報告をおこなってきた。

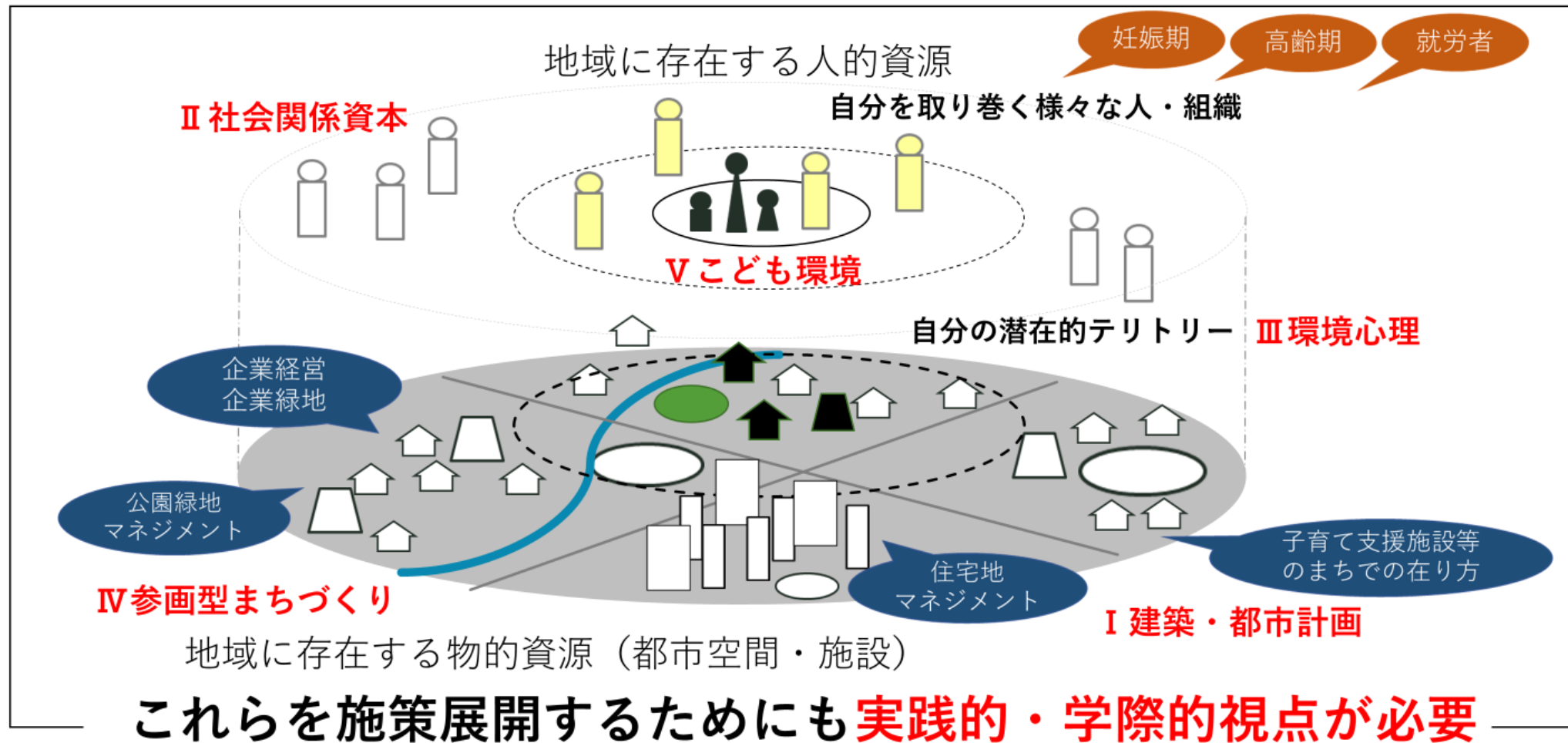
特に、ここ数十年で子どもの捉え方や支援の仕方の変容は目まぐるしい。こども家庭庁がスタートし「こどもまんなか社会」のスローガンは他分野でも少しずつ浸透しつつあるが、未だ子ども関係の業界のみにとどまっている印象もある。「少子化なのになぜ、社会全体で子どもにそこまでやらなければいけないのか」「子どもだけを真ん中にしても解決しないのでは？」「子どもの最善の利益ってなに？」というモヤモヤを抱きながら“子どもを真ん中”にする意味、手法を模索している。

本フォーラムでは、第1部で現代社会において変容する子どもと子どもを取り巻く環境について、各学問分野の最新の研究事例を用い、多分野領域から子どもの健全な成育環境について捉える。

第2部では、こども家庭庁の現在の取組みを踏まえ、本来の「こどもまんなか社会」の真髄に迫る。

子育てに資する土壌づくりはまちづくり

- I. まちや施設という“器”はどういう構造になっているのか。それらの時系列で理解（**建築・都市計画**）
- II. まちをシェアする人同士はどのようにつながってコミュニティ組織となっているのかの解明（**社会関係資本**）
- III. その“器”を、人や組織はどのように認識し、利・活用しているのか。潜在的テリトリー、生活圏の解明（**環境心理**）
- IV. その“器”を利用する多様な人がそれをどう活用し、マネジメントしていくべきか（**参画型まちづくり**）
- V. それを生活弱者、特に子ども（親子）の発達・成長を軸に捉える（**子ども環境**）



子どもを育む環境としての都市計画・まちづくりの課題

“現代版群れた地域コミュニティをつくる”ためのまちづくりの課題

1. 家族の変容(核家族化、夫婦共働き等)に伴い

「地域社会で群れてまねる子育て」(vs子育て)」を どう捉えるかの観点が不足

①男女の役割を分担推進する住宅地開発(住宅政策)から、
男女が共に働き群れた暮らしをするための居住政策への転換

②子ども達が集団で過ごすという場の多様化とゆるやかなつくり込みが必要

・遊び相手が見つけられない、他者とふれあう機会が減っている子ども達にとっては、そのような設え(例:単目的施設から複合目的施設)の必要性が高まる。

・限られた地域資源の中で施設とその環境を、誰がどのように 企画、管理、活用していくかといった地域での『エリアマネジメント』の観点に、子どもの主体性の構築も必要。

→空き家・空きビル、空き教室、公園、道、公開空地等の“まち”のシェア

子どもの育ちを軸に、そしてライフスタイルにあった

個人—家庭—地域—仕事—ケアのバランスがとれた「生活者」でいられ続けるまちづくり

→住む—働く—暮らす—互助の場の再想定

子どもを育む環境としての都市計画・まちづくりの課題

“現代版群れた地域コミュニティをつくる”ためのまちづくりの課題

2. “地域”で子育てすると謳われているものの
受け手となる“地域”ってどこの誰？私のこと？
その当時者性は不明瞭でわかりにくい
3. 胎児期～特に就学前の子ども達が集積する場が複雑化
「これからそこに育っていく子どもが集う場」と見る
子育てを支援する視点が決定的に欠如
4. まちなかにおいて子どもで客体ではなく主体として捉える視点の欠如
学童期後半～中学生・高校生にとっての主体的な居場所となる空間も不足
5. 人口減少社会において、
地方都市の生活圏と子どもが育つ社会関係資本をどう捉えるべきか

地域でつなげる子育て・まち保育

『まち保育』とはなにか

子どもの育ちに“まち”を開き
子どもとともに“まち”が育つ…

子どもと保護者の育ちを
血縁関係だけでなく
地域社会で共有するため
多様な主体を巻き込みながら
地域資源を活用した
まちとの関り方を促す手法論



「まち保育」は、子どもたちの生活を
より豊かにするものです。

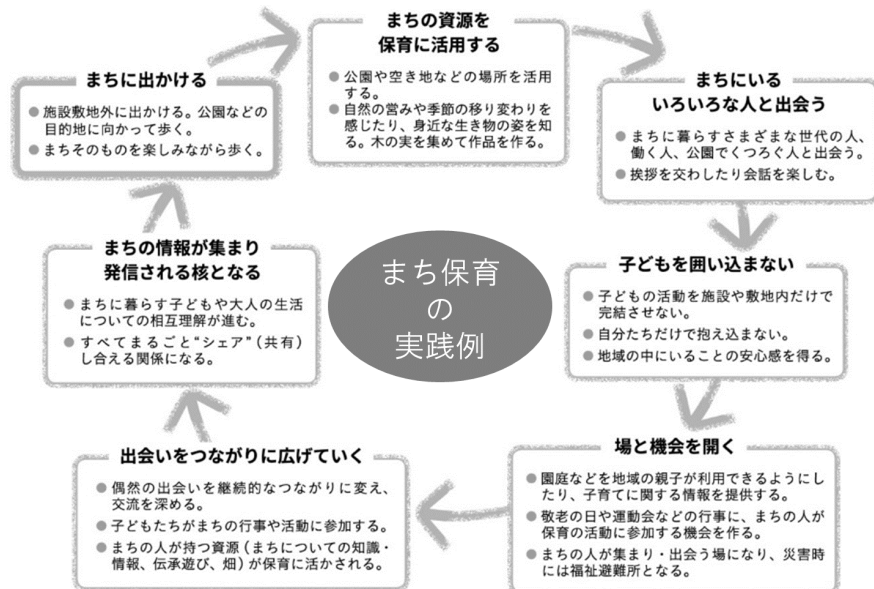
それは、保育施設・教育施設の
園外活動だけを指すものではありません。

まちにあるさまざまな資源を保育に活用し、
まちでの出会いをどんどんつないで
関係性を広げていくこと、
そして、子どもを囲い込まず、
場や機会を開き、
身近な地域社会と一緒に、
まちで子どもが育っていく土壌づくりをすることを
私たちは「まち保育」と呼んでいます。

子育て支援の場においても、
家庭生活においても、
また地域の活動においても、
「子どもがまちで育つ」視点を
大切にしてほしいと考えています。

「保育」

乳幼児を適切な環境のもとで健康・安全で安定感をもって活動できるように
養護するとともに、その心身を健全に
発達するように**教育**すること



※まち保育の実践はさまざまな形が考えられます。ここで示しているのはほんの一例です。



出典：

『まち保育のススメ

—おさんぽ・多世代交流・地域交流・防災・まちづくり』

2017年5月5日発行（萌文社）より

第26期子どもの成育環境分科会メンバーによる多角的な視点整理

(赤字が第一部の登壇者)

【子どものいのちと安全】

- ・日本の新生児・周産期医療の歴史と現状（高橋尚人）
- ・子どもの生活状況の多角的理解に基づく
安全な環境のデザイン（西田佳史）
- ・子どもの食の安全ー学校給食と食中毒（水口雅）

【子どものころ】

- ・発達障害と乳幼児健診ー五歳児健診の意義を問う（神尾陽子）
- ・AI共生時代に必要となるヒトの脳と心（明和政子）

【子どもと家族】

- ・多様化・複雑化する家族のウェルビーイング（浅野 みどり）
- ・子どもと家族のウェルビーイングに影響する環境（法橋尚宏）

【子どもにとって居心地のよい空間】

- ・不登校、社会的養護等の子どもたちの居場所（石崎優子）
- ・健康・運動能力・学中意欲を高める空間づくり（伊香賀俊治）
- ・感覚に優しい社会生活環境の普及（上野佳奈子）

【子どもと地域社会】

◆乳幼児期における地域社会との連携

- ・子どもと大人による地域社会の探究が見出すもの
ー境界線に焦点を当てて（小玉亮子）
- ・倉橋惣三の誘導保育論ー「こどもまんなか社会」の実現
に向けた保育のあり方を考える（湯川嘉津美）

◆学童期以降の地域社会との連携

- ・農村立地小規模校における探検学習の再構築（神吉紀世子）
- ・子どもたちが長時間過ごす「学校」という場所
ー学習環境の変化と地域拠点性（斎尾直子）
- ・子どもとともにつくる児童館
ー人口減少時代の居場所再編に向けて（安部芳絵）

◆子どもとともに地域社会も育ち合うまちづくりへ

- ・子育てに資する土壌づくりはまちづくり
ー地域でつなげる子育て:まち保育（三輪律江）